

「鈍獣」 ★★★

2009（平成21）年4月24日鑑賞<GAGA試写室>

監督：細野ひで晃
原作：舞台『鈍獣』（2005年、宮藤官九郎）
脚本：宮藤官九郎
凸（でこ）やん（凸川隆二）（小説家）／浅野忠信
江田（えだ）っち（江田）（ホスト）／北村一輝
岡本（警官、江田の腰巾着）／ユースケ・サンタマリア
静（しずか）（週刊大亜の編集者）／真木よう子
順子ママ（江田の愛人）／南野陽子
ノラ（ホステス）／佐津川愛美
明（あきら）／ジェロ
編集長／本田博太郎
理事長／芝田山康（第62代横綱・大乃国）
2009年・日本映画・106分
配給／ギャガ・コミュニケーションズ

<浅野忠信の落差にビックリ！>

私が4月23日の試写会で観たのが、本作と同じ浅野忠信主演の『劔岳 点の記』（08年）だが、そのキャラクターは本作とは正反対。というより、同じ俳優とは思えないほどの落差にビックリ。もちろん、私は『劔岳 点の記』や『モンゴル』（07年）で観た浅野忠信の方が好きだが、俳優として幅を広げるためには、たまにはこんなキャラを演ずるのもいいのかも？

プレスシートには「たぶん、僕にとって新境地といえる作品です」と書いてあるが、こんなケツタイな役を彼が演ずるのは、本作がはじめて、かつ最後？

<北村一輝とユースケ・サンタマリアは、まさにはまり役！>

「いかにも鈍くさい人がやっても面白くないでしょ。それで悩んでいたとき、偶然、浅野さんと会ったんです。そうしたら佇まいがちょっとヘンで（笑）。あ、これは浅野さんで凸やんなら面白いんじゃないかと思えたんです」という理由で、細野ひで晃監督から白羽の矢を立てられこれを快諾（？）した浅野忠信だが、当然その賛否は分かれるはず。

それに対して、映画全編に2人つるんで出演（？）する、いかにも濃いキャラのホストクラブ“スーパーヘビー”のオーナー江田っちを演ずる北村一輝と、何でも「ですよねえ・・・」という追従キャラの警官、岡本を演ずるユースケ・サンタマリアは、まさにはまり役。また、出演シーンやセリフの量は、むしろ浅野忠信より北村一輝とユースケ・サンタマリアの方が多からスクリーン上ではこの2人が主役？しかし、いかにも謎めいた『鈍獣』というタイトルの妙と、ラストに待ち受ける大きなドンデン返しの妙を具現するのは浅野忠信だから、ストーリー構成上の主役はやっぱり浅野忠信演ずる凸（でこ）やん、あるいは凸（でこ）川？

<ケツタイなストーリーは？ケツタイな掛け合いは？>

『鈍獣』ワールドに登場する3人の男たちのキャラはそれぞれケツタイだが、ケツタイな切り口によるケツタイなストーリーは、一方では小説『鈍獣』で明多川賞にノミネートされた小説家凸川隆二が突如失踪したところからスタートする。一体彼は、なぜ？ひょっとして何らかの犯罪に？

他方、本作の本命ストーリーは第62代横綱大乃国の芝田山康の登場でわかるように、なぜかすべて相撲中心に回っている、とある地方都市で“スーパーヘビー”を営む江田っちのもとに突然凸やん（凸川？）（浅野忠信）が現れたところからスタートする。

みんながわんぱく少年だった今から25年前、江田っちと岡本が凸やんと凸川に鉄橋で度胸試しの相撲ごっこをさせようとしたところ、岡本のある錯覚のためにわんぱく相撲の西の横綱だった凸川は列車事故で死んでしまったのでは？したがって、凸やん（凸川？）の登場に江田っちと岡本はビックリ。また、凸川隆二が週刊誌に連載している小説には25年前のお話が生々しく描かれていたから、さらにビックリ。名前こそ多少変えているものの、こんな小さなまちではまちの人たちがそんな週刊誌を読めば江田っちと岡本のバカさ加減が白日のもとに。

こりゃやばい。何とか小説の連載を止めなければ。しかし毎晩、「もうおしまい？」と言いながら“スーパーヘビー”を訪れてくるこのすつとぼけた凸やん（凸川？）が、ホントに有名作家の凸川隆二？そして、目の前の凸やん（凸川？）がホントにこの連載小説を書いているの？

江田っちと岡本がいくらそれを問い詰めても、話はトンチンカンかつチンプンカンプン。このケツタイなストーリーは一体ナニ？そして、このケツタイな掛け合いは一体ナニ？

<真木よう子も南野陽子もいい味だが、佐津川愛美は？>

本作の見どころは、最後に種明かしされる不可解な謎を含みながら展開されていくケツタイな3人の男たちの掛け合いの妙だが、それに絡む3人の女たちも面白い。

その第1は、キリリとしたキャリアウーマンぶりを発揮しながら（？）、凸川隆二先生失踪事件解明のために、ホストクラブ“スーパーヘビー”を訪れた週刊大亜の編集者である静（真木よう子）。しかし、彼女の事情聴取能力では、真相にたどり着くのはとてもムリ？

第2は、今なおアイドル時代の美貌をそのまま残す（？）、1967年生まれの名野陽子演ずる“スーパーヘビー”の順子ママ。

この2人の女優は結構魅力的なキャラを發揮しているが、唯一人オーディションで選ばれたという佐津川愛美演ずる“スーパーヘビー”のホステス、ノラは、そのあまりのおバカキャラに辟易。本人は「楽しくて、楽しくて、最高でした！」と述べているが、還暦を迎えた私には、やっぱりここまでのアホバカギャルはノーサンキュー。

<私には、よくわからん・・・>

本作の原型は、クドカンこと宮藤官九郎が書き下ろした伝説の舞台劇『鈍獣』。それに惚れ込み映画化を熱望したのが、CM界の鬼才と言われている細野ひで晃監督だ。その結果、クドカンが再度映画用に『鈍獣』ワールドの脚本を書き直したらしい。しかし、どうも私には鈍くて死なない人間、すなわち愚鈍な獣＝鈍獣というイメージやそこから広がる世界観がイマイチ理解できない。

つまり、『鈍獣』ワールドのストーリーの骨格は、わんぱく時代の凸やんと凸川が25年後一体どう変化しているのか、ということ。つまり、あの列車事故で凸川は死んだはず。そして東京に出た凸やんは立身出世して人気小説家凸川隆二になったはず。しかるに、そんな凸川隆二が今、暴露小説のような小説を週刊誌に連載しているのは一体なぜ？そしてまた何よりも、今江田っちと岡本の目の前にいる凸やんはホントの凸やん？それとも死んだはずの凸川？ひょっとして、凸やん（凸川？）は生きてるの？そして、目の前にいる凸やん（凸川？）は肉体だけ醜く成長した、感情を持たない、愚鈍な獣なの？だから、いくら殺しても死なないの？

そんな『鈍獣』ワールド、私にはよくわからん・・・。